

## 第四章 夕霧の物語 落葉宮に心あくがれる夕霧

[第一段 夕霧、返事を得られず]

山下ろしいとはげしう(山おろしがとても激しく)、木の葉の隠ろへなくなりて(木の葉が散り去って吹き曝しになった小野山荘は)、よろづの事いといみじきほどなれば(全てがとても寒々しく身に染む季節となって)、おほかたの空にもよほされて(空しく過ぎる日々を)、干る間もなく思し嘆き(涙の乾く間も無く泣き暮れなさって)、「命さへ心になはず(思うように死んでしまうことも出来ない)」と、厭はしういみじう思す(と宮は御息所の死を悼んで悲しみなさいます)。さぶらふ人びとも、よろづにもの悲しう思ひ惑へり(仕える女房たちも何かにつけもの悲しく思い途方に暮れていました)。

大将殿は、日々に\*訪らひきこえたまふ(大将殿は使者を遣わして宮に毎日お見舞申し上げなさいます)。\*寂しげなる念仏の僧など、慰むばかり(山荘が寂れないように、手持ち無沙汰の念仏僧などを慰めるほどの)、よろづの物を遣はし訪らはせたまひ(いろいろな贈物を届けて与えなさって)、\*「訪らひきこえたまふ」は注に<お見舞いの使者を差し向ける、の意。>とある。「聞こえたまふ」相手先は宮だ。\*「さびしげ」は<心細そう>ではなく<閑そう=退屈そう>なのだろう。悪霊との戦いに心血を注ぐのは熱いが、念仏行は心静かに唱える。修行には違いないが、鍛錬の戒律行ではなく思考の見聞行だろうから、山籠もりならぬ奉公なら、むしろ宮びを広めたい機会なのかも知れない。それが質素がちな山荘暮らしでは当て外れだったりして、そのへんを何かと、衣服なり、食物なり、書物なり、を差し入れて肝入れしたのだろう。「寂しげなる念仏の僧など慰むばかり」が「日々に訪らひきこゆ」内容の初めの説明になる語り口が意味するところは何か。僧を厚遇して、心のこもった念仏勤行を上げてもらう事が御息所の供養になる、という理屈よりは、そういう行いに明け暮れる山荘生活を豊かに維持する事が今の宮の体面を保つ実質での援助であり、その任を果たす事が大将の体面を施す、という大将の役割認識を示している、ように見える。そういう役割認識の社会性は王家への憧憬とも不可分で、大将の恋心はその権威志向の中で醸成されている。ただ惜しむらくは、宮には男に思われる女冥利に溺れる覚悟が持てるほどの自我形成は無い、ということだ。が、序でに言えば、開拓精神に必要な自我形成は、和を以て尊しと成す飽く事なき循環生活に於いては、必ずしも崇高な価値概念ではない、というヒト組織の厳然たる事実がこの物語に大きく横たわって話の幅を広げている。是が無い個的な話は社会規模が描けないので、実は底が浅い。そして、この物語では個人の心情は歌で表現する、という巧みな手法を取っている。

宮の御前には(宮に向けては)、あはれに心深き言の葉を尽くして怨みきこえ(心を込めた言葉の限りを尽くしてお悔やみの御手紙を差し申し上げ)、かつは(併せて)、尽きもせぬ御訪らひを聞こえたまへど(尽きることなくお慰みの品々をお贈り申しなさるが)、取りてだに御覽ぜず(宮はそれらを手に取って御覧になることもなく)、\*すずろにあさましきことを(節度無く軽率だったあの夜の事を)、弱れる御心地に(母上は気弱なご病状で)、疑ひなく思ししみて(私たちが結ばれたものと疑いなく思い込みなさって)、消え失せたまひにしことを思し出づるに(その後の大将の失礼に憤激して、亡くなってしまったとお考えになって)、\*「すずろにあさましきこと」は<成り行き任せの軽はずみなこと>みたいな言い方だが、御息所が「疑ひなく思ししみて」いたと<宮が考えること>を言っている訳だから、宮としては自身が潔白と主張する<大将殿との情交>を意味しているのだろう。ただ、御息所自身の考えでは、恐らくではあるが、三十路に掛かろうかという男女の情接自体は然したる問題ではなく、朱雀院の女二の宮と源の大将殿が男女の関係になったと見做される蓋然性がある事実が確認された、という事態自体の社

会的意味の重大さに悩んだ、かとは思ふ。そして作者は、そのへんの兼ね合いを読者に意識させたまま書き進めていると思われるので、その意を汲んで言い換えたい。

「後の世の御罪にさへやなるらむ(母上の成仏の妨げにもなろう)」と、胸に満つ心地して(と反感が胸にこみ上げて)、この人の御ことをだにかけて聞きたまふは(大将殿に関わる事を少しでも耳になさるのは)、いとどつらく心憂き涙のもよほしに思さる(服喪に悲しむ身に更に辛く悔し涙を誘うようにお思いになります)。人びとも聞こえわづらひぬ(女房たちも取り成しようがありません)。

一行の御返りをだにもなきを(一遍のお返事すらないのを)、「しばしは心惑ひしたまへる(暫くは取り乱していらっしゃるのだらう)」など思しけるに(などと大将はお思いだったが)、あまりにほど経ぬれば(あまりにそれも長いので)、

「悲しきことも限りあるを(悲しむにもほどがある)。などか、かく(どうしてこのような無礼をなさるのか)、あまり見知りたまはずはあるべき(あまりに常識が無くていらっしゃる)。いふかひなく若々しきやうに(聞き分けの無い子供みたいだ)」と恨めしう(と不平も露わに)、

「異事の筋に(不幸に反して)、花や蝶やと書けばこそあらめ(花や蝶やと浮かれ文句を書き送ったのなら返事が無いのも無理ないが)、わが心にあはれと思ひ(心底同情して)、もの嘆かしき方ざまのことを(困り事が)、いかにと問ふ人は(何かないかと訪ねる人は)、睦まじうあはれにこそおぼゆれ(親身に感じ入るものだらうに)。

大宮の亡せたまへりしを(大祖母様が亡くなったのを)、いと悲しと思ひしに(私はとても悲しんだが)、致仕の大臣のさしも思ひたまへらず(藤原殿はそれほどにはお悲しみなさらず)、\*ことわりの世の別れに(寿命による死別とのことで)、\*公々しき作法ばかりのことを孝じたまひしに(儀礼上での然も格式ばった葬儀を上げなさったので)、つらく心づきなかりしに(悲しく情けなかったが)、六条院の(源氏殿が)、なかなかねむごろに(却って懇ろに)、後の御事をも営みたまうしが(後の御法事を営みなさったのが)、わが方ざまといふ中にも(身びいきとは言え)、うれしう見たてまつりし(嬉しく思いました)。その折に(その法事で)、故衛門督をば(故衛門督のことが)、取り分きて思ひつきにしぞかし(特に好印象だったのです)。\*「ことわり」は<道理、当たり前のこと、誰にでもあること>。「世の別れ」は<死別、寿命>。\*「おほやけおほやけしきさほふばかりのこと」は注に<表向きの儀式。『集成』は「源氏も、致仕の大臣の人柄について「人柄あやしうはなやかに、男々しきかたによりて、親などの御孝をも、いかめしきさまをばたてて、人にも見おどろかさむの心あり、まことにしみて深きところはなき人になむものせられける」(野分)と夕霧に語ったことがある」と注す。>とある。

人柄のいたう静まりて(彼は性格がとても落ち着きがあつて)、物をいたう思ひとどめたりし心に(大宮の思い出を大事にしている)、あはれもまさりて(その死を悼み)、人より深かりしが(誰より悲しんでいたのが)、なつかしうおぼえし(共感できたのです)」

など(などと分別のあった藤君と無礼な宮との対比や)、つれづれと\*ものをのみ思し続けて(大宮の死を御息所の死に準えて母の死を思ってみたり、まとまりも無く宮の返事が無いことの意味だけを思い巡らして)、\*明かし暮らしたまふ(空虚に日を過ぎなさいます)。\*「ものをのみ」の「も

の」とは、「一行の御返りをだにもなき」こととその意味・理由など、なのだろう。\*「あかす」は「空かす(虚しくする)」の意、かと思う。

## [第二段 雲居雁の嘆きの歌]

女君(大将夫人は)、なほこの御仲のけしきを(やはり夫と小野山荘の宮との御仲を)、「いかなるにかありけむ(どうなっているのだろう)。御息所とこそ、文通はしも、こまやかにしたまふめりしか(御息所とは手紙の遣り取りを密になさっていたようだが)」など思ひ得がたくて(などとはっきりしないと思ったので)、夕暮の空を眺め入りて臥したまへるところに(夫が夕暮れの空を眺めて物思いに耽っていらっしゃるところに)、若君してたてまつれたまへる(子供を使いを立ててお尋ねなさいました)。

はかなき紙の端に(日用の紙切れに)、

「あはれをもいかに知りてか慰めむ、あるや恋しき亡きや悲しき (和歌 39-11)

「さてはどちらの物思い、仏やもしや生き仏 (意識 39-11)

\*和歌というには軽過ぎる、川柳めいたお座敷小唄の趣き。だが、そこが新しい。朱雀院の尚侍の君を思わせる藤原姫の歌風。

おぼつかなきこそ心憂けれ(分からないのが気懸かりです)」

とあれば(とあったので)、ほほ笑みて(大将は微笑んで)、「先ざきも、かく思ひ寄りてのたまふ(妻は以前も同じような事をお聞きになった)、\*似げなの(「恋しき」などとは変な言い掛かりで)、亡きが\*よそへや(「亡き」などと故人までも引き合いに出したりして)」と思す(とお思いになります)。\*「似げな」は「似げ無し(似合わない、相応しくない)」の簡略化した言い方で、「あるや恋しき」と浮気を疑うのを<不当な言い掛かり>と言っている、らしい。\*「よそへ」は「寄そへ・比へ」で<比べる事、引き合い>。「△が▲や」は<△が▲なのか>という疑問調の反論文型なのだろう。「や」は下に<けしくあらむ>などが省かれている係助詞とも、言い切りの感嘆詞とも、取れそうだ。

いとどしく(そこで大将は敢えて一層)、ことなしびに(何気無さそうに)、

「いづれとか分きて眺めむ、消えかへる露も草葉のうへと見ぬ世を (和歌 39-12)

「何につけても物思い、露と消え去るはかなさに (意識 39-12)

\*北の方の「いかに知りてか」に対して、その設問自体を「いづれとか分きて」と打消す。が、それは質問をはぐらかす常套手段なので、回答を避けてとぼけて逃げた形だ。

おほかたにこそ悲しけれ(世の全般の無常こそが悲しいのです)」

と書いたまへり(と返歌をお書きになりました)。

「なほ、かく隔てたまへること(やはりこのように隠し立てなさる)」と(と夫人は)、露のあはれをばさしおきて(露と消える世のはかなさなど殊更然程に言い立てることもない)、ただならず嘆きつつおはす(宮と大将の御仲をただごとではないと嘆いていらっしやいます)。

なほ(やはり大将は)、かくおぼつかなく思しわびて(このように宮の返事が無いのを気懸かりに思いあぐねなさって)、また渡りたまへり(再び山荘へお出掛けなさいます)。「\*御忌など過ぐしてのどやかに(忌明け後にゆっくりと)」と思し静めけれど(と控えていらっしやったが)、さまでもえ忍びたまはず(そこまで我慢がお出来になれません)、\*「おんいみなどすぐして」は注に<『集成』は「三十日の忌籠り」。『完訳』は「忌中の四十九日」と注す。>とある。御息所の命日は八月二十日過ぎなので、7週間後だとすると十月の中旬くらいが忌明けとなる。

「今はこの\*御なき名の(もはやこの度の宮の濡れ衣は)、何かはあながちにもつつまむ(どうにも言い逃れは通らない)。ただ世づきて(もう男女の仲になって)、つひの思ひかなふべきにこそは(遂に思いを遂げるべき時が来たのだ)」\*「無き名」は<根拠のないうわさ。無実の浮き名。ぬれぎぬ。>と大辞林にある。

と(と大将は)、思し\*たばかりにければ(思ってその手筈を進めなされたので)、北の方の御思ひやりを(奥方の御懸念を)、あながちにもあらがひきこえたまはず(無理に打消そうとはなさいません)。\*「たばかり」は<計画する、計略を立てる>また<算段する、相談する>ということのようで、此処の語りは、大将の状況判断として宮がもう抵抗できない立場にあり、大将自身も積極的に肉体関係を結ぶ行動に出る意志を固めたが、と同時に、従者や宮付きの女房たちにも、その下話を着けて置く、と方針を立てたことで、早晚、奥方にも知れることになる、という説明文らしい。

正身は強う思し離るとも(宮ご本人が大将を強く拒もうとお思いになっても)、かの一夜ばかりの御恨み文をとらへどころにかこちて(あの御息所の一夜限りでの不参をお嘆きなされた手紙を証文として持っていたので)、「えしも、\*すすぎ果てたまはじ(とても潔白を言い張れなされまい)」と、頼もしかりけり(と大将は余裕がありました)。\*「すすぎ」は「濯ぐ(洗い清める、そそぐ)」で<汚名を払拭する→疑いを晴らす→潔白を証明する>。

### [第三段 九月十日過ぎ、小野山荘を訪問]

九月十余日、野山のけしきは(九月十日過ぎの野山の秋の深まりは)、深く見知らぬ人だに、ただにやはおぼゆる(風情を解さぬ者でも物寂しさを感じずにはいられません)。山風に堪へぬ木々の梢も(山風に葉を持ち堪えられない木々の枝先も)、峰の葛葉も(山肌のつる草の裏白の葉も)、心あわたたしう争ひ散る紛れに(気忙しく先を競って散り紛れる小野山荘に)、尊き読経の声かすかに、念仏などの声ばかりして、人のけはひいと少なう(尊い読経の声が微かに念仏などを唱える声だけがして人の気配はとても少なく)、木枯の吹き払ひたるに(木枯しが落葉を吹き払うと)、鹿はただ籬のもとにたたずみつつ(鹿が庭先の垣根のもとに佇んで)、山田の引板にもおどろかず(田んぼに引き回した鹿避け鳴り板にも驚かず)、色濃き稲どもの中に混じりてうち鳴くも(実り深い稲田の中で鳴いているのも)、愁へ顔なり(人恋しげです)。

\*滝の聲は、いとどもの思ふ人をおどろかし顔に、耳かしかましうとどろき響く(滝の音は物思いに耽る他人を驚かすように耳にうるさくとどろき響く)。\*草むらの虫のみぞ、よりどころなげに鳴き弱りて(草むらの虫だけが頼りなさそうにか細く鳴いて)、枯れたる草の下より、龍胆の、われひとりのみ心長うはひ出でて、露けく見ゆるなど(枯れ草の下からリンドウの花がひとり悠長に茎を長く伸ばして露に濡れているのなどは)、皆例のこのころのことなれど(皆例年通りのこの頃の風情だが)、折から所からにや(忌中の山荘の所為か)、いと堪へがたきほどの、もの悲しさなり(とても堪えられないほどの物悲しさです)。\*「滝の聲」は<音羽の滝。>と注にある。今でも偲ばれる風情なのだろうか。\*「草むらの虫のみぞ」は注に<『完訳』は「草が枯れて隠れ処のない虫に、頼るべき人のない宮をかたどる」と注す。下文の龍胆を宮に、虫は仕える女房たちをかたどるとも解せよう。>とある。リンドウは大将をかたどっている、のではないか。

例の妻戸のもとに立ち寄りたまて(大将はいつもの西廂の妻戸の前に立ち止りなさって)、やがて眺め出だして立ちたまへり(そのまま庭を見渡していらっしやいました)。なつかしきほどの直衣に(着慣らした略式の上着に)、\*色こまやかなる御衣の\*擣目(青地の内着の打目模様が)、いとけうらに透きて(とても清らかに透けて光って)、影弱りたる夕日の(晩秋の日差しが弱った夕日)、さすがに何心もなうさし来たるに(そうは言っても遠慮なく部屋の奥まで差し込んでくるのを)、まばゆげに、わざとなく扇をさし隠したまへる手つき(眩しそうに然り気無く扇で避けていらっしやる大将の手つきを)、「\*女こそかうはあらまほしけれ(宮様にこそこうあってほしいものです)、それだにえあらぬを(子供じみて、その程度の色気さえないんだから)」と、見たてまつる(と御簾内の女房たちは拝し申し上げます)。\*「色こまやか」は<色が濃い>。「色濃し」といえば<紫か紅の濃色>をいうらしい。「龍胆(りんだう)」の襲ねの色目は<表が薄蘇芳で裏は青。>と古語辞典にあるので、やはり赤系統の袍の下に紫の裃(あこめ)を着ていた、と読んで置く。「擣目(うちめ)」は<艶を出すために絹布を砧で打ち出した打ち目模様>らしい。\*「女こそかうはあらまほしけれ」は注に<女房の視点・心中で夕霧の美しさを語る。係助詞「こそ」--「あらまほしけれ」已然形、逆接用法。>とある。「をんな」は一般論なのか。敬語遣いが無いので<宮ではない>ようにも見えるが、既に大将が「たばかりにければ」、実質上の主人は大将で、宮はその<女>だ、という認識が此処の女房たちにも仕込まれていた、という状況説明に読めなくもないような、気がした。「見たてまつる」は、そういう女房たちの認識を示している、と読んで置く。この状況で、今後の生活を一体誰に頼れると言うのか。朱雀院は山籠りしているし、藤原殿は大将への遠慮もあってか、藤君の母親と宮と肌が合わなかったりするのか、藤原家として尻が引けている。実際、大将の他には誰もいない。

\*もの思ひの慰めにしつべく(宮が嘆きの慰めにするのに最適と思える)、笑ましき顔の匂ひにて(余裕のある笑顔の表情で大将は)、少将の君を、取り分きて\*召し寄す(少将の君をご指名で呼び寄せなさいます)。\*「もの思ひの慰めにしつべく」には敬語遣いが無い。しかし、女房たち自身が大将を「慰めにしつべく」思うのは僭越に過ぎる。やはり、これは女房たちの内心での認識を示していて、「もの思ひの慰めにし」ているのは<宮>で、「つべし」は女房たちの判断だ、と読んで置く。\*「召し寄す」は主人が従者を<呼び寄せなさい>という言い方なのだろう。

簀子のほどもなけれど(小少将は簀子に然程は離れていなかったが)、奥に人や添ひみたらむとうしろめたくて(大将は御簾の奥に他の女房がいるだろうと気が引けて)、えこまやかにも語らひたまはず(親しくはお話しなされません)。

「なほ近くて(もっと近くに)。な放ちたまひそ(離れなさるな)。かく山深く分け入る心ざしは(このように山深くまで分け入って来た親身な私に)、隔て残るべくやは(余所余所しくするとは)。霧もいと深しや(打ち解けて接しても、この霧の深さなら人目にも付きませんよ)」

とて(と言って大将は)、わざとも見入れぬさまに(特には御簾内を覗き込むでもないように)、山の方を眺めて(とぼけて山の方を眺めて)、「なほ、なほ(もっと近くに)」と切にのたまへば(としきりに仰るので)、鈍色の几帳を(忌中のねずみ色の几帳を)、簾のつまよりすこしおし出でて(すだれの下端から少し押し出して)、裾をひきそばめつつゐたり(小少将は着物の裾を引き整えて簀子前に座しました)。大和守の妹なれば(この女房は大和守の妹なので)、離れたてまつらぬうちに(宮には従姉妹という近縁者と申し上げる上に)、幼くより生ほし立てたまうければ(御息所が幼い内からお育て下さったという母代わりだったので)、衣の色(きぬのいろ、喪服の色が)いと濃くて(とても濃くて)、\*椽の衣一襲(黒い重ね内着一式に)、\*小桂着たり(更に黒の正装上着を着ていました)。\*「椽の衣一襲(つるばみのきぬひとかさね)」は<喪服一式>の言い方でもあるようだが、此处では上に「衣の色いと濃くて」とあるので、この「椽(つるばみ)」は具体的な色合いを説明しているのだろう。「衣一襲(きぬひとがさね)」は「桂(うちき、内着と言っても装飾布を省いた場合の準正装上着)」の下に着る三枚以上の<重ね着一揃い>とのこと。「つるばみ」は大辞林に<クヌギの古名。また、どんぐりの古名。>とあり、また<どんぐりの実やかさの煎汁(せんじゅう)で染めた色。>ともあり、染め色としては<古代は鉄媒染による黒に近い灰色で、身分の低い人の衣の色。平安期には茜(あかね)を加えて、四位以上の人(ほう)の色となる。>とある。ざっと<黒>と置いて置く。\*「小桂(こうちぎ)」は<上流夫人の通常礼服。>と古語辞典にあり、準正装の上着のことで、是も「つるばみ」だったのだろう。

「かく尽きせぬ御ことは(この尽きることもなく惜しまれる御息所の御逝去は)、さるものにて(それはお悔やみ申し上げるとしても)、聞こえなむ方なき御心のつらさを思ひ添ふるに(一切お返事を下さらないという、申し上げようもない宮の御心のつれなさを思い合わせると)、\*心魂もあくがれ果てて(気丈さも途方に暮れて)、見る人ごとに咎められはべれば(会う人毎に正気を疑われておりますので)、今はさらに忍ぶべき方なし(これ以上お会い申さずに、お返事をお待ち申す事は出来ないのです)」 \*「こころだましひ」は<正常な心の働き。正気。>と大辞泉にある。「あくがれ果つ」は<心が体から抜け出てしまう>。「魂が抜ける」は<氣力を失う←心を奪われる>語感だが、それよりは<理性を失う←判断力に自信を失う>という言い方だろうか。

と(と大将は小少将に)、いと多く恨み続けたまふ(とても多くの恨み言を言い続けなさいます)。かの今はの御文のさまものたまひ出でて(あの御息所の最後のお手紙の大将の不参を嘆く文面も言い出さなさい)、いみじう泣きたまふ(切ない心情に泣きなさいます)。

#### [第四段 板ばさみの小少将君]

この人も(小少将も)、ましていみじう泣き入りつつ(大将以上に深く泣き入っては)、

「\*その夜の御返りさへ\*見えはべらずなりにしを(その夜の殿の不参理由が見えるべきお手紙すら明るる日にも拝見申しませんでしたので)、今は限りの御心に(殿のお見限りの改まる見込みはないと御息所は気落ちなされた御心のままに)、やがて思し入りて(そのまま悲観なさい)、\*

暗うなりにしほどの空のけしきに(日も暮れてこの日も不参と知らせる御手紙のあった虚しさに)、御心地感ひにけるを(御病状が重くなり)、さる弱目に(そうした弱り目に)、例の御もののけの引き入れたてまつる(かねてからの物の怪が御息所の生気を霊界に引き込み申し上げた)、となむ見たまへし(どのように私は思っております)。\*「そのよのおんかへり」は<その日の夜に来るべき御返事>とは思えない。御息所の手紙が三条の大將邸に届いたのが「宵過ぐるほどにぞ」(三章二段)であってみれば、その返事は翌日であって普通だろう。となると、「その夜の」とは<その夜の殿の不参の>であり、「御返り」は<理由の言い訳の御手紙>を意味しているのではないか。その咎め口調が「見えはべらず」という言い方になっている気もする。非常な難文だが、そう読んで置く。\*「見えはべらずなりにしを」は客観事実の丁寧表現で<ございませんでしたので>で良いように思うが、注には<主語は御息所。>とあって混乱する。で、私は前項ノートの解釈に則って、「見ゆ」を<分かる>の意と取りつつも、表意は<ある>という客観事実を示す語として、あえて小少將の主観文のように言い換えてみた。が、些か深追いの感。\*「暗うなりにしほどの空のけしきに」は注に<『集成』は「いよいよ大將の訪れがないと確信された頃」と注す。>とある。従って、明示補語する。

\*過ぎにし御ことにも(前の夫君の御不幸にも)、ほとんど御心感ひぬべかりし折々多くはべりしを(御息所は悲観のあまり、ほとんど御氣力を失いなさりかけた時々が多くございましたが)、宮の同じさまに沈みたまうしを(宮が同様に悲嘆に暮れていらっしゃるのを)、\*こしらへきこえむの御心強さになむ(お励まし申し上げようとの御氣丈さで)、やうやうものおぼえたまうし(だんだん持ち直しなさいました)。\*「過ぎにし御こと」は注に<柏木逝去の折をさす。>とある。\*「こしらふ」は「小調ふ(ちょっと手直しをする)」の語感で<取り成す、取り繕う>などとあるが、此処では<立ち直らせる→励ます>のだろう。

この御嘆きをば(今度の御息所の御不幸については)、御前には(おまへには、宮様におかれては)、ただわれかの御けしきにて(もう魂の抜けた御様子で)、あきれて暮らさせたまうし(呆然と過ごしていらっしゃいます)」

など、とめがたげにうち嘆きつつ(などと涙を止められなさそうに息を詰まらせながら)、はかばかしうもあらず聞こゆ(たどたどしく申し上げます)。

「そよや(そのことだよ)。そもあまりにおぼめかしう(ともかくあまりに世事に疎く)、いふかひなき御心なり(聞き分けのないお考えです)。今は(今のお暮らし向きは)、かたじけなくとも(こう申すのも恐れ多いことながら)、誰をかはよるべに思ひきこえたまはむ(誰のお蔭だと思いでいらっしゃるのでしょうか)。御山住みも(みやまずみも、入山なさっている朱雀院も)、いと深き峰に(とても熱心に修行なさっていらして)、世の中を思し絶えたる雲の中なめれば(世情をお捨てなさった雲中暮らしでいらっしゃるようなので)、聞こえ通ひたまはむこと難し(ご相談申しなさることもお出来になれないでしょう)。

いとかく心憂き御けしき(非常に心外なこのような宮の御態度の不都合さを)、聞こえ知らせたまへ(あなたから宮へ良くお知らせ申して下さい)。よろづのこと、さるべきにこそ(万事成るようにしか成りません)。世にあり経じと思すとも(死んでしまいたいと思いで)、従はぬ世なり(適わないのが世の中です)。まづは、かかる御別れの(第一、こうした御息所とのお別れが)、御心にかなはば(御意に反する事なら)、あるべきことかは(起きていないでしょうに)」

など(などと大将は)、よろづに多くのたまへど(多面的にいろいろと仰るが)、聞こゆべきこともなくて(小少将はお答えのしようもなくて)、うち嘆きつつゐたり(困りながら聞いていました)。

\*鹿のいといたく鳴くを(牡鹿が雌鹿を求めて頻繁に鳴くのを)、「われ劣らめや(自分も負けないほどの人恋しさだ)」とて、 \*此処の言い回しは、下敷きの引歌引用に<『源氏釈』は「秋なれば(あきなれば)山響むまで(やまとよむまで)鳴く鹿に(なくしかに)我劣らめや(われおとらめや)独り寝る夜は(ひとりねるよは)」(古今集恋二、五八二、読人しらず)を指摘。>と参照指摘がある。

「里遠み小野の篠原わけて来て、我も鹿こそ声も惜しまね」(和歌 39-13)

「遠く小野まで遣って来て、鹿十は然かと泣けてくる」(意識 39-13)

\*「里遠み」は<人里が遠いので>と渋谷訳文にある。名詞+形容詞語幹+接尾語「み」、という言い方は、名詞で表わされた対象体の形容された特徴の程度や状態が、以下に述辞される事柄の理由や原因である事を説明している、場合が多いらしい。確かに此処でも<人里が遠い>ということは「小野」の説明にはなっていそうだが、<人里が遠い>ということは、大将が「小野」に居る事の原因や理由ではない。この歌の中で<人里が遠い>ということが理由になるとすれば、強いて言えば<何しろ人里から遠いからさあ>という大雑把な意味に読んで、「我も然かこそ(私も此処の牡鹿と同じほどには)」に繋げそうだが、それは味わいとして読者が考えるもので、詠み手の言う「里遠み」は直接にはやはり「小野」に掛かる。だから、この接尾語「み」は形容語幹に付く他の多くの語と同様に、基本的にはその形容事象の程度や状態を実感として示す言い方で、見・実・身および味に通じる語感であり、それを名詞化語用するのも、説明句語用するのも、感嘆句語用するのも、さまざま文脈に拠るのであって、此処では理由ではなく実感を伝える言い方として<こんなに里から遠くまで>という意味で「小野」に掛かる、もしくは「小野」を言い出す、枕なのだろう。で、「小野の篠原」は「小野」が<篠竹が群生すること有名な所>だったことに洒落込んで、「分けて(山道を分け入って)」を言い出す枕なのだろう。こういう言い方をしないと「分けて来て(わざわざ特別に遣って来て)」があまりに大儀の押し付けがましい。ただ、この手の勝手な大儀は、受ける方は基本的に有難迷惑なので、変に洒落込まれるほど鬱陶しい。慇懃無礼、ってヤツだ。また、「われもしかこそ(私も此処に相応しく)」の「しか」も「わけて来て」いる「小野の篠原」のことを示す。「しか」が「鹿」に掛かるのは、前振りの「鹿のいといたく鳴くをわれ劣らめや」に拠るのであって、歌自体での「しか」は「然か」の意だ。が、「声も惜しまね」が<鳴く→泣く>を連想させるのは「鹿」あつてのこと、ではある。それにしても、この歌は「小野の篠原」や「鹿」を登場させて紛らわせてはいるが、どうも「分けて来て」が大将の言いたいことの核心らしく、如何にも重役の貫禄を勿体つけた保護者気取りの趣きで、その呆け様が「わけてきて」という接続助詞「て」を重ねる稚拙にも見える言い方に表われている。ただ、この手の実力を笠に着た色男ぶりは、ヒヒ親爺のイヤラシサ、というよりは、努力を惜しまない健気な可愛さ、であることの方が実相だ。人は限りある命を生きる。

と\*のたまへば(と一句おっしゃると)、 \*「のたまふ」は「聞こえたまふ」とは違って、宮への伝言を小少将に言う、のではなく、小少将自身に話す、という言い方だ。が、大将の歌は宮に撥ね付けられた情けなさを愚痴った趣で、独り言か、あえて言えば宮への怨み節の贈歌で、少なくとも小少将への贈歌ではない。語感としては、独り言を言った、感が強い文意。

「藤衣露けき秋の山人は、鹿の鳴く音に音をぞ添へつる」(和歌 39-14)

「喪服で泣き飽きない人は、鹿の声にも鳴き返す」(意識 39-14)

\*注にはく小少将の君の返歌。「鹿」の語句を受けて返す。『全集』は「山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目を覚ましつつ」（古今集秋上、二一四、壬生忠岑）を指摘。>とある。当歌の歌意は大将への同感を示す唱和歌ではないが、かといって、決して返歌ではない。強いて言えば、全面拒否の姿勢で返歌が見込めない宮の代返の意味は有りそうだが、そも今の時点では宮に伝えていないのだから、それもあくまで小少将独りの思索上の判断であり、客観事実としては即応歌に過ぎないのであり、詠み手が設けられた御題に各々の感想を詠み合った歌会合わせの趣向だ。ただ、此处では御題の提示も大将自身なので、その意味では、形式上は大将への唱和歌ということにはなりそう。で、歌合せと言えば、この古今集の引歌は詞書に「是貞親王家歌合(これさだみこのいへのうたあはせ)の歌」とあり、大将の歌の前振りに引歌引用された「秋なれば山とよむまで鳴く鹿に我劣らめや独り寝る夜は」（古今集恋二、五八二、読人しらず）も詞書に「是貞親王家歌合の歌」とある、というネタらしい。是貞親王家歌合の御題は「秋」と「鹿」だったらしく、この場面に符合する。当時の宮廷読者の常識を踏まえた語り口なのだろう。それでも小少将は使用人の立場上、主人筋の大将に愛想の一つも言わねばならない。「鹿の鳴く音に音をぞ添へつる」というベタなダジャレ落ちの大喜利物はくあなたの気持ちはきっと宮に通じますよ>という秋波になっていて、「藤衣露けき秋の山人」の無礼も今日の所は収めて下さい、という宥めになる苦肉の策ではある。歌としての出来の悪さも含めて、小少将の立場が上手く浮き上がる一句としては上出来だと作者は思ったか。その意図を念押しするかの下の一文だ。因みに私はこの意識歌を上出来だと自負する。

よからねど(歌としての出来は良くなかったが)、折からに(この場に相応しい)、忍びやかなる声づかひなどを(低い声遣いで詠んだ小少将の唱和歌を)、\*よろしう聞きなしたまへり(気の利いた切り返しだと大将は聞きなさいました)。\*「よろしう聞きなしたまへり」は大将の一定の納得感が示されている。小少将の苦心を汲んで、今日の所は事を荒げずに引き下がるかの雰囲気。小少将の顔を立てる、みたいな場面だ。

御消息とかう聞こえたまへど(大将は宮への御伝言をいろいろと取り次がせ申しなさったが)、

「今は、かくあさましき夢の世を(今はこのようにあまりの変化に夢のように思えていますが)、すこしも思ひ覚ます折あらばなむ(少しは目覚めて落ち着く時があれば)、絶えぬ御とぶらひも聞こえやるべき(絶えないお見舞いにも御礼申し上げられますかと)」

とのみ(とだけ宮は)、すくよかに言はせたまふ(大将への形ばかりの挨拶を小少将に取り次がせ申しなさいます)。「いみじういふかひなき御心なりけり(まったく困った物分りの御悪さだ)」と(と大将は宮の無礼を)、嘆きつつ帰りたまふ(嘆きながらお帰りになります)。

[第五段 夕霧、一条宮邸の側を通過して帰宅]

道すがらも(大将は帰りの道すがらも)、あはれなる空を眺めて(哀れを誘う空を眺めて)、十三日の月のいとほなやかにさし出でぬれば(十三夜の月がとても明るく差し出していたので)、\*小倉の山も\*たどるまじうおはするに(薄暗さを思わせる地名の右京の小倉の山道でさえ迷わない気がしなさって)、一条の宮は道なりけり(一条の宮邸は小野から都へ戻った左京口から右京口へ向かう道に面していたのでした)。\*「をぐらのやま」は、当時の宮廷読者にとっては一寸した洒落語用の語り口なのだろうが、言い換えでは文自体で意味が通るように逐一明示補語した。小倉山は嵯峨野を裾野とする右京の西にある小高い地とのこと。左京の東に当たる小野とは都を挟んで反対側だ。\*「たどる」はくまごつく>。

いとどうちあばれて(一条宮邸は宮が小野山荘に移りなさってからは、一層寂れて)、未申の方の崩れたるを見入るれば(南西の土塀の崩れた所から中を覗くと)、はるばると下ろし籠めて(屋敷は全面に格子戸を下ろし込めて)、人影も見えず(人影も見えません)。月のみ遣水の面をあらはに澄みましたるに(月だけが庭の水面を澄まして浮かんでいる姿に)、大納言、ここにて遊びなどしたまうし折々を(故大納言藤君が此処で曲水の宴などを催しなさった時のことなどを)、思ひ出でたまふ(大将は思い出しなさいます)。

「見し人の影澄み果てぬ池水に、ひとり宿守る秋の夜の月」(和歌 39-15)

「今では枯れた池水を、まだ照らしてる秋の夜の月」(意識 39-15-1)

「張り合いもなく池水を、ただ照らしてる秋の夜の月」(意識 39-15-2)

\*「見し人」と言えば普通は<愛した女>を意味する、かと思う。が、この歌での意味上での句節は「見し人の影」の七文字で<この邸でかつて見た人の姿>になるようだ。この詠み方は、上文の「人影も見えず月のみ遣水の面をあらはに澄みましたる」を受けたもの、との指摘は注にもある。「すみはてぬ」は「住み果てぬ」で<住み切れなかった=既に死んで居なくなってしまった>だから、藤君だけでなく御息所のことでもあって、だからこそ後に一人残された宮を「ひとりやどもる」と寂しげな「秋の夜の月」の姿に準えて、その気高さと頼りなさに大将は独り感じ入っている、という場面なのだろう。と同時に、やはり大将にとって「見し人」と言えば、それは<目を掛けて面倒を見てきた人=宮>に他ならない。「澄み果つ」は<澄み切る=すっきりする>だから、「影澄み果てぬ」は<態度が煮え切らない>と、宮をこの庭の「いけみずに」準えれば、それでも「ひとり宿守る秋の夜の月」は大将自身を自嘲気味に客体視してもいるのだろう。こういうA面B面がくっきりした複意の歌詠みは久しぶりかも知れない。

と独りごちつつ(と独り言を言いながら)、殿におはしても(大将は自宅にお帰りになっても)、月を見つつ心は空にあくがれたまへり(月を見ながら心は空にさまよっていらっしやいました)。

「さも見苦しう(如何にも恋煩いの上の空で)。あらざりし御癖かな(前にはなかった此の頃の御傾向です)」

と、御達も憎みあへり(と古女房たちも懸念し合っていました)。上は、まめやかに心憂く(正夫人の奥方は心底嫌がって)、

「あくがれたちぬる御心なめり(恋の虜になってしまった殿の御心のようです)。もとより\*さる方にならひたまへる六条の院の人びとを(以前から何人もで住んでいらっしやる六条院の夫人方を)、ともすればめでたきためしにひき出でつつ(ともすれば高官らしい華やかな生活の例に引き出しては)、\*心よからずあいだちなきものに思ひたまへる(一人で地味にこの家を取り仕切っている私を、考え方の狭い世間を知らない者のように思っただけでいらっしやる)、わりなしや(困ったもんだわ)。 \*「さるかた」は<愛妾が同居する生活形態>。注には<一夫多妻の同居生活をさす。>とある。 \*「心よからずあいだちなきもの」の内容は「めでたきためし」の反対概念だろうから<地味で世間の狭い生活>あたりを見当する。

我も、\*昔よりしかならひなましかば(私も昔からそのように暮らしていたなら)、人目も馴れて(他の女を意識することにも慣れて)、なかなか過ごしてまし(そういう付き合いが出来ただろうに)。\*「昔より」は男女間の嫉妬感情はそれはそれとして、家の秩序や特に子育てに於いての立場認識の微妙さは、一旦固まってしまってからの変更は非常に難しくなる事は想像できる。夫人の言い方や考え方は生活感に基づいて、それだけに深刻かも知れない。

世のためしにしつべき御心ばへと(世の模範にすべきほどの殿の御誠意だと)、\*親兄弟よりはじめてまつり(親兄弟を初め申し上げ)、めやすきあえものにしたまへるを(優れた手本になさっていらっしゃったものを)、ありありては(こういうことになる)、末に恥がましきことやあらむ(晩節に惨めな目に遭いかねない) \*「おやはらから」は藤原殿と藤原の君たち、という重さだ。

など、いといたう嘆いたまへり(などとそれはもうとても嘆きなさったのです)。

夜明け方近く、かたみにうち出でたまふことなく、背き背きに嘆き明かして、朝霧の晴れ間も待たず、例の、文をぞ急ぎ書きたまふ(夜明け方近くに、互いに話し掛けなさることも無しに背中を向けて嘆き明かして、朝霧の晴れ間も待たずに、大将は例によって宮への手紙を急いでお書きになります)。いと心づきなしと思せど(夫人はまったく心外なお思いになるが)、ありしやうにも奪ひたまはず(前のように手紙を奪い取りはなさいません)。

いとこまやかに書いて(とても思い入れ深く書いて)、うち置きてうそぶきたまふ(筆を置くと口に出してお読みになります)。忍びたまへど(低い声だが)、漏りて聞きつけらる(漏れて隣で横になっていらっしゃる夫人に聞き付けられます)。

「いつとかはおどろかすべき明けぬ夜の、夢覚めてとか言ひしひとこと (和歌 39-16)

「あさましいなら夢の夜を、朝に覚ましに行きましょう (意識 39-16)

\*注にく夕霧から落葉宮への贈歌。宮の「あさましき夢の世をすこしも思ひ覚ます折あらば」と言った言葉を受けて詠み贈る。>とある。「おどろかす」が<眠りを覚ます>と<不意に訪ねる>の意味で使える語なので、「夢覚めて」いるなら<訪ねたい>でもあり、不意に訪ねて「夢覚め」させようか、にもなる句。「明けぬ夜」が「あさましき夢の世(朝の勢いが増して来る夢の夜)」なら、「思ひ覚ます折」も近いと思える「夜明け方近く」の場面、ということか。寂れた一条邸を見ても、大将の思いは募るばかりのようで、このベタな言い回しに歌の味わいなんてものがあるのだろうか。私には、歌の工夫すら思い付かない大将の焦りを示しているようにしか見えない。作者には何か別の意図があるのだろうか。あまりにベタで、何かないと可変しい気もするが、分からない。せめてもの洒落心が下の添え句の「上より落つる」に示されているだけにさえ見える。大体が、宮の言った「今はかくあさましき夢の世を、すこしも思ひ覚ます折あらばなむ、絶えぬ御とぶらひも聞こえやるべき」も、「すくよかに言はせたまふ」(四段)と素っ気無さを印象付けようとした語り口だったが、如何にも何かの前振りめいた理屈っぽい言い回しで、およそいつもはまともな返事もしない宮の台詞にしては、多くの読者はワザとらしい印象を持った事だろう。

\*上より落つる(音無しの滝がある小野山では、どうせ貴方からの‘上から落ちる’知らせは音沙汰無いでしょうから) \*注にく『源氏積』は「いかにしていかに住むらむ奥山の上より落つる音無の滝」(出典未詳)を指摘。>とある。出典未詳では字面で読む他はないが、「おとなしのたき」は大原三千院の奥にある

小野山から流れ落ちる滝のことらしく、「おくやま」が小野山のことであることから引用された句、ではあるらしい。で、「いかにすむらむ」は<耳を澄まして音を聞けば良いのか>と<何時まで暮らせば良いのか>。「うへよりおつる」は<(滝が)流れ落ちる>と<(お咎めが)上から解ける>。とでも読むのだろう。

とや書いたまひつらむ(とでも、その漏れ聞こえた声からすれば、お書きになったようで)、おし包みて(大将はその手紙を表紙に押し包んで)、名残も(封書に認めた後でも)、「\*いかでよからむ(これでいいだろうか)」など口ずさびたまへり(などと浮かれ気分で洒落込んで呟いていらっしやいました)。人召して賜ひつ(使者を呼んで手紙を小野へ届けさせなさいます)。\*「いかでよからむ」は、上文の「上より落つる」で引いた古歌の「いかにしていかに住むらむ」を文字って、道化している大将の様子を示す表現、なのだろう。注には<『集成』は「前注に引く歌(源氏釈所引歌)とは別の引歌があるかとも考えられるが、「いかにしていかによからむ」の調べにならって口ずさんだものか」と注す。>とある。従って、全体の文意を左様に明示補語する。

「御返り事を\*だに見つけてしがな(ぜひ宮様の御返事を見てみたいものだ)。なほ、\*いかなることぞ(一体、二人は本気なのだろうか)」と(と夫人は)、けしき見まほしう思す(二人の関係の様子を窺いたくお思いになります)。\*「だに」は<せめてこれだけはという最小限の望みを表わす副助詞>のように古語辞典に説明がある。確かに希求感のある語だが、必ずしも<せめてこれだけは>という言い方に成るものではないだろう。「だ」は限定強調の副詞ないし接頭語で、「に」は被修飾対象体を示す格助詞、と見れば、「だに」は連語で<どうしてもそれだけは=是非それを>という言い方にも成る、かと思う。なお、この文の主語は北の方で、それは文意から肯けるが、大将にも夫人にも敬語遣いなので、大将が主語の上文から続けて読み進むと、相変わらずに如何にも主語が紛らわしい。\*「いかなることぞ」の「ぞ」の強調は何を意味するか。大将が宮と付き合っている事は周知の事実だ。が、分からないのは真相だ。が、真相など当人でも分からなかったりする。北の方の関心は、二人が本気か如何なのか、の一点にあると私は思う。一時浮ついた関係で終わる遊びなら、目を瞑る他は無。しかし、宮を正妻に迎えるということなら、それは自分の人生に多大な影響を及ぼす。許せない、だろう。

#### [第六段 落葉宮の返歌が届く]

日たけてぞ持て参れる(日が高くなってから使者が返書を持って帰ってきました)。紫のこまやかなる紙すくよかにて(紫の濃い色の包み紙で儀礼上麗々しく)、小少将ぞ、例の聞こえたる(小少将がいつものように書いてきました)。ただ同じさまに(今回も同様に)、\*かひなきよしを書きて(宮様のお返事は頂けなかったとの申し訳があつて)、\*「かひなきよし」は、自分が宮に返事を出すようにお勧め申した<効果もなかった経緯>みたいな言い方で、実際の文面には具体的な勸奨例もあったのだろうが、注には<宮の返事が頂けない旨を書いて。>とあり、結果としてそういうことになるのだろう。

「いとほしさに(それだけでは心苦しいので)、かのありつる御文に(頂戴した殿のお手紙に)、手習ひすさびたまへるを盗みたる(宮が落書きなさったのを隠し取りました)」

とて(とあって)、中にひき破りて入れたる(封書の中にその宮の落書きを引き破って入れてあります。)、 「目には見たまうてけり(宮は私の手紙をご覧にはなったのだ)」と、思すばかりのうれしさぞ(とお思いになるだけで嬉しがる大将の姿というものは)、いと\*人悪ろかりける(まるで威厳がありません)。\*「ひとわるし(みつももない、外聞が悪い)」は分かり難い。もともと恋愛事は私的な

もので、その限りでは、他人に知られない限りは、外聞の良し悪しは無い筈だ。それがどうしても外見に出る、という事が問題だとするなら、外聞が悪い―大将らしくない―威厳がない、くらいを考えてみた。冗句か。

そこはかたなく書きたまへるを(宮が取り留めもなく書き散らしなさったのを)、見続けたまへれば(大将は見続けなさと)、

「朝夕に泣く音を立つる小野山は、絶えぬ涙や音無の滝」(和歌 39-17)

「泣き声立てる小野山に、絶えぬ涙の音無の滝」(意識 39-17)

\*この歌は宮の自作なら、独詠歌になるのだろうか。本人の意には反すも、大将の許へ届いたのだから、大将にとっては返歌に見えなくもない。みたいな微妙さ。歌筋は、泣き暮らす毎日に余念は無い、みたいな相変わらずの追善修行ぶりを示しているようでも、歌趣は「をのやま」や「おとなしのたき」の風情を詠み込んで、情緒を訴えている。何より、「小野山」「音無しの滝」は大将が歌に添えた「上より落つる」の下敷きにした古歌「いかにしていかに住むらむ奥山の上より落つる音無の滝」に詠まれた風情で、それを宮が重ねて詠み込んだということは、大将の「上より落つる」に宮が反応した、ことを示している。大将にとっては、物凄手応え、かもしれない。

とや、とりなすべからむ(とでも読むのだろうか)、古言など(古歌などを)、もの思はしげに書き乱りたまへる(思い巡らしながら乱れ書きなさっている)、御手なども見所あり(御筆跡なども御教養の高さが偲べれます)。

「人の上などにて(他人事だと)、かやうの好き心思ひ焦らるるは(こうした恋心に思い焦がれるのは)、もどかしう(滑稽で)、うつし心ならぬことに見聞きしかど(正気の沙汰でもないように見聞きして来たが)、身のことにては(自分のこととなると)、げにいと堪へがたかるべきわざなりけり(実にまったく辛いものだ)。あやしや(分からない)。など、かうしも\*思ふべき\*心焦られぞ(どうしてこれほどにまでなるのか、心騒ぐことだ)」 \*「思ふべき」の「べし」は必然意の助動詞。思ってしまう。 \*「こころいらる」は「心苛らる」ともあり<苛立つ>。

と思ひ返したまへど(と大将は宮への肩入れを考え直そうとなさるが)、えしもかなはず(とても出来ません)。